



私のアイデンティティーとは？

守屋留学生交流協会 第二十六回奨学生

鄭 光峰

私

は中国で生まれ育った朝鮮族である。国籍上は中国人、民族的には朝鮮民族という特別な立場に立っている私は、幼い時から中国語と朝鮮語、二つの言語を扱うことのできるバイリンガルであった。そして、日本語を第一外国語として勉強してきた私は、日本に留学する機会を得ることができ、日本に来た後は、中国人はもちろん、日本人、韓国人と一緒にいる機会が多くなった。私は彼らとお喋りをする時、中国人とは中国語、日本人とは日本語、韓国人とは韓国語（韓国語と朝鮮語はほぼ同じで、普通に会話可能である）で話していると、多くの日本人は不思議そうに、「あなたはどこの人ですか」という質問をしてくる。

その時、私は当たり前のように、「私は中国人です。中国の朝鮮族です」と答える。私を含めほとんどの朝鮮族にとって、「祖国」や「我が国」といえば、「中国」を指す言葉であり、国籍上の国、つまりその地で生まれ、その地で育った中国に対してより深い感情を持っているからである。そのため、「中国人」であることが先行し、その次に「朝鮮族」として自らをアイデンティファイする場合が多い。

「朝鮮族」といえば、韓国人・北朝鮮人と同じと考える日本人が多いと思うが、実は韓国人・北朝鮮人とは違い、長い間、中国で生活しているうちに独自の民族性を持つようになってきている。そこでまず最初に、中国の朝鮮族について、簡単に紹介したいと思う。

朝

鮮族は、中国に存在する56の民族の一つの少数民族（中国には56の民族が住むが、その中で漢族が総人口の約90%を占めるため、漢族以外の民族を少数民族と呼ぶ。朝鮮族は総人口の約0.17%しか占めていない）であり、韓国・朝鮮系中国人のことを指している。中国における朝鮮族の人口はおおよそ200万人で、主に東北三省、つまり黒竜江省、吉林省、遼寧省に居住している。中でも、吉林省延辺朝鮮族自治州には80万人以上の朝鮮族が集住しており、朝鮮族文化を維持し、発展させる主体となっている。ちなみに、私の故郷は黒竜江省で、約45万人の朝鮮族が住んでおり、特色としては朝鮮族村が多いところである。そして、黒竜江省の省都であるハルビン市には、今も南朝鮮（現在の韓国のこと）出身の朝鮮族が多く、親戚訪問などで韓国に行ったことのある人も多い。

現在、多くの朝鮮族は漢族と混住しており、飲食や住居など日常生活の面で漢族の影響を多く受けている。そのため、だんだん漢族に同化してしまう部分もあれば、いまだに強い民族意識を持ち続けているため、風俗・習慣や文化を守り続けている部分もある。

例えば、春節（旧正月）になると、家々では「除夕」といわれる大晦日から盛り上がるのだが、漢族が深夜0時に餃子を食べるのに倣い、朝鮮族の間でもいわゆる「年越し餃子」を食べる習慣が定着しつつある。また、毎年の大晦日、20時から放送される「春節晚会」（日本の「紅

白歌合戦」のような番組）を漢族と同じように楽しんでみたり、子どもたちは、漢族の子どもたちと同じように花火をあげたり、爆竹を鳴らしたりして新年を祝う。

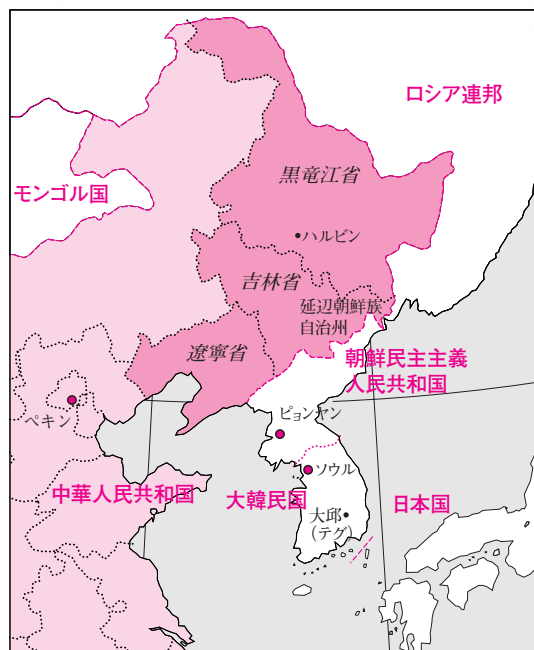
一方、新年になると、朝鮮族の食卓には朝鮮民族ならではの食べ物や、餅類（チャルトク・シリトク・ソンプジョン）などが並び、子どもたちが親や祖父母に歳拝（セベ）を行う朝鮮民族の伝統的な風習が今もきちんと守られている。

昔

から朝鮮族は教育熱心な民族といわれ、学校教育を重視してきた。現在、中国には朝鮮族小・中・高等学校が数多くあり、また、朝鮮族の高等教育を目的に設立された「延辺大学」もある（この大学は、中国初の少数民族大学でもある）。

朝鮮族小・中・高等学校では、朝鮮語と漢語（中国語は地方毎に多くの方言があり、北京語など北方方言を基礎とする共通語を漢語という）の二つの言語による指導、いわゆる「双語教育」が実施されており、朝鮮族学校に通えば、朝鮮語も漢語も身につけることができる。しかし最近では、漢族学校が朝鮮族学校よりレベルが高くなり、朝鮮族の子どもたちも漢族学校に通いはじめるようになってきている。そのため朝鮮語をよく身につけていない子どももだんだん増えている。

本格的な外国語教育は、中学校からカリキュラムに組み込まれている。漢族は英語、朝鮮族は日本語を選ぶのが一般的であったが、最近では英語ブームのため、朝鮮族も英語を選ぶようになり、日本語を学ぶ学生はだんだん減っているそうだ。



私自身は、小・中・高等学校は朝鮮族学校に通い、小学校一年生から朝鮮語、小学校二年生から漢語（現在は漢語も一年生から教えている）、中学校から日本語を教わった。その他の授業、数学、化学、物理、政治、歴史、地理などのほとんどは、朝鮮語で行なわれた。私が一番好きだった授業は日本語の授業で、日本語の文法に興味を持つようになった。大学に進学する時、日本語の文法についてもっと深く勉強したいという気持ちが大きかったため、日本語専攻を選んだのである。大学卒業後、黒龍江省のある朝鮮族学校で日本語を教えたが、その時、私ははじめて自分自身の知識や教え方が不十分であることを実感した。自分自身の教え方に十分な責任を持たなければならないと心から深く反省し、みんなに尊敬される日本語教師になるためには、もっと勉強しなければならないと思い、日本に留学することにしたのである。

私が朝鮮族ということを知った人からは、「北朝鮮については、どう思いますか」という質問も多く受ける。

私の祖父は、戦争で親を亡くし、一九三〇年頃に親戚に連れられ、自分より三歳上の兄と一緒に韓国の大邱（テグ）から中国に渡ったそうだ。だから、私は韓国の子孫ともいえるのだが、その質問には、私は必ず「私には、韓国も北朝鮮も同じですが、北朝鮮により親しみを感じています」と答える。それは、韓国人と同じく勤勉な民族なのに、いまだに生活に苦しんでいる北朝鮮の人々を憂う気持ちがあるからである。

「日本については、どう思いますか」という質問も多い。

私が日本に来て、もう五年になる。最初の頃は、常に日本と中国の生活や習慣を比べ、日本に対して批判ばかりしていたが、日本の生活に慣れていくとともに、日本という国にだんだん親しみを感ずるようになってきた。一昨年中国に帰った時、友達に「日本は島国だから、日本人は心が狭いでしょう」とか、「日本人の本音と建て前が嫌いなんだよね」などと決めつけて言われたことがあった。その時、私はなんともいえない気持ちになってしまい、日本人（？）という立場に立って必死に反論した。その時は、日本を離れて数日しか経ってはいなかったのだが、すぐに日本に戻りたくなくなってしまった。なぜか、日本でよく食べている寿司やそば、日本でよく見ているお笑い番組、よく歌っている日本の歌が、懐かしくてたまらなくなったのである。自分でも不思議に感じるほどであった。

それでは、私のアイデンティティーは一体どこにあるのだろう。いくら考えてもはつきりとした答えは出ないのだが、二つのオ

リンピックを通して、自ら感じたことを述べてみたいと思う。

二〇〇〇年、私が中国にいた時、オーストラリアでシドニーオリンピックが開かれた。当時、韓国と北朝鮮は開幕式で朝鮮半島が描かれた旗を持って同時行進した。同じユニホームを着てお互いに交わって手と手を繋いで入場する選手たちを見ていた私は、感動のあまり思わず涙を流してしまった。一方、中国、マカオ、香港、台湾は、同じ中華子孫なのにみんな違う旗を持ってそれぞれ入場している場面を見てガッカリし、複雑な気持ちになってしまった。

その八年後、私がちょうど日本に留学している時、中国で北京オリンピックが開かれた。日本に来るまでは、日本選手に興味を持っていなかった私は、日本に来てから、自分自身も知らないうちに、日本選手にだんだん興味を持つようになった。テレビを見ながら、メダルを獲った選手とは一緒に喜んだり、試合に負けた選手とは一緒に苦しんだり、励ましの言葉をかけたりして、日本人と一緒にになった気持ちで日本という国を応援した。

21世紀は国際化時代ともいわれるが、アイデンティティーもまた国際化していくべきものである。中国⇨中国人、日本⇨日本人といった国家単位で考えるアイデンティティーの在り方は、確かにまだ根強い思想である。しかし、そこから抜け出すことができこそ、真の国際化といえるのではないだろうか。私は、中国で生まれ育った朝鮮族であり、そして今、日本に留学している。だからこそ、私には私にしか感じるこのできないものがある。それがいわゆる私のアイデンティティーというものではないだろうか。